

サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の考古学調査(2019)

—中世の港町の構造を探る—

長谷川 奏 早稲田大学総合研究機構客員教授
 徳永 里砂 アラブ・イスラーム学院研究員、金沢大学客員准教授
 西本 真一 日本工業大学建築学科教授
 恵多谷雅弘 東海大学情報技術センター研究員
 藤井 純夫 金沢大学特任教授

Archaeological Research at al-Hawra', Red Sea Coast of Saudi Arabia (2019): Survey on the Site Plan of the Medieval Port

HASEGAWA, So Visiting Professor, Comprehensive Research Organization, Waseda University
 TOKUNAGA, Risa Researcher, Arabic Islamic Institute in Tokyo and Visiting Associate Professor, Kanazawa University
 NISHIMOTO, Shin-ichi Professor, Nippon Institute of Technology
 ETAYA, Masahiro Researcher, Tokai University Research Information Center
 FUJII, Sumio Specially Appointed Professor, Kanazawa University

本報告では、サウジアラビアと日本の合同調査隊による紅海沿岸のハウラー(al-Hawra')遺跡調査(2019/2-3)の成果を中心に記す。紅海は、ローマ時代には『エリュトラエ海案内記』で知られる海上交易の場であり、イスラーム時代には交易港としての機能に加え、マッカ巡礼路の通過地点となったが、本発表では、地表面観察で確認される初期イスラーム時代のトピックに限定して報じる。研究対象のエリア(図1)、はイスラーム以前よりジュハイナ族のテリトリーであった。9世紀以後には、エジプトからの巡礼路上の港町として頭角を現し、内陸のワーディー・アル＝クラの諸都市の港として機能し、ハイバルの港とも記述された。12世紀半ば頃までハウラーは存続したようであるが、ヤークート(d.13C.)等の記述から総合すると、13世紀前半には廃墟と化したことが文献資料から窺われる。私たちは、ヒトやモノのネットワークの実態を解明するために、ハウラー遺跡に加え、遺跡のある小湾の後背部を形成する山間部の巡礼路(マディーナ al-Madina～ウラー al-Ula～タイマー Tayma')との総合考察を行っている。

ハウラー遺跡は、タブーク州ウムルジュ Umluj の10 km ほど北に位置する。南北に2 km、東西に0.5～1.0 km 程度の広がりを持ち、サウジの国家遺産観光庁によって保護されている。1980年代に在地の考古学研究者によって部分的な試掘調査が行われたが、基

本的には未調査の遺跡である。遺跡は港域と集落域に

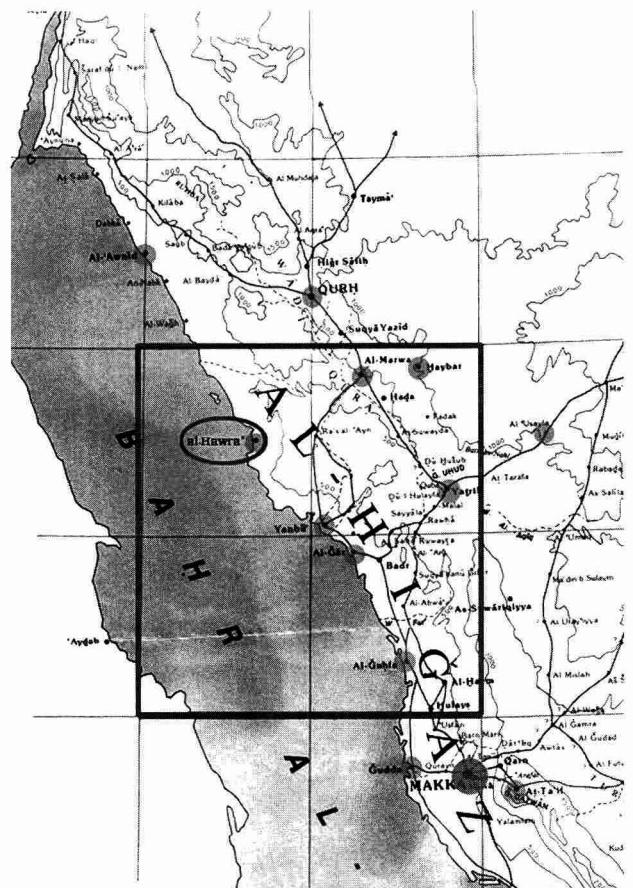


図1 研究対象地域の位置と都市 Sidebotham op.cit., Fig. 7-1



図2 ハウラー遺跡のおおよその構造

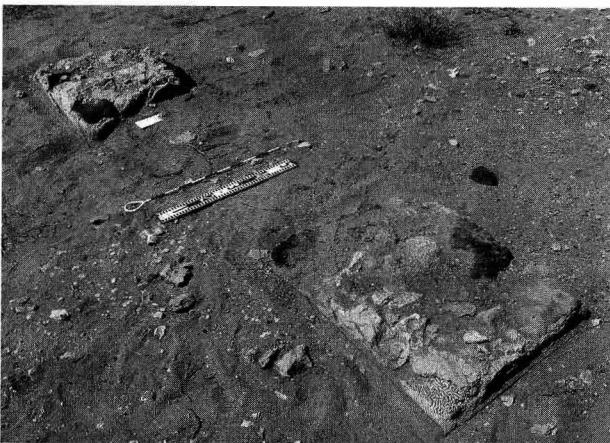


図4 モスクと推測される遺構

分化されるが(図2)、本報告では、集落域を中心に報告する。集落域は東西300m、南北150mほどの規模を測り、ここには家屋の集中区があったと思われる。分布する遺構の多くは、黒色の火山岩ブロックや白色の珊瑚ブロックを用いた壁体の基部である(図3)。上部構造は既に失われているが、壁体の幅は、外壁と思われるものは0.7~0.9m程度、間仕切りの内壁と推測されるものは0.4~0.5m程度の壁厚の異なりもみられ、残された基礎部からは、いくつかの住居が復元されていくであろう。またこれらの住居の部屋には、炉と推測される遺構や、セメントが用いられた床面の痕跡がみられるものもある。1980年代の試掘でみつかったモスクからは、方形の煉瓦タイルで舗装された床面やクーファ書体の碑文と植物文様を有する建材等がみつかった(図4、5)。当該区では、1980年代の試掘



図3 壁体基礎部の外観

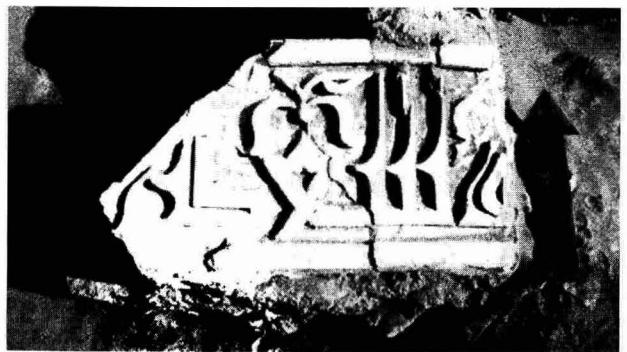


図5 出土した石製リントル
al-Ghabbân, op.cit., p. 343, Fig. 129b (vol. 1)

調査でクルアーンの一節が記された堂々とした石製リントルが取り上げられており、モスクの存在も推測される。

集落域に分布する遺物は、素焼きの土器、陶器(青緑釉(図6)、黄釉、白濁釉等)、石製容器、ガラス器等の生活雑器が中心となるが、これらの多くはアルカリ釉のものである。またラスター彩(図7)は、白い石質の陶土に特徴があり、イラクやシリアからの影響とも推測された。一方、黄釉や緑釉の下に幾何学状の彩画が描かれたもの(図8)は、当該のヒジャーズ地域で生産されてその技法がヨルダン等でも共有されたスプラッシュ文の陶器と考えられる。さらに地域に固有の製品としては、ステアタイトと呼ばれる加工しやすい軟質の石で作られたランプ(図9)や石製容器がある。この点に関しては、イドリースイー(d.12C.)のハウラー近郊の石産業に関する記述と関わるとも思われる。さらにその他の遺物には、装身具や道具、石製ステラ等が取り上げられたが、それらの総体は、概ね9~12世紀頃に位置づけられた。さて、集落域に戻ると、ウムルジュ湾全体を見渡せる見通しの良い高台からは、ランドマークともなる象徴的な建造物が発見された。



図6 青緑釉陶器片

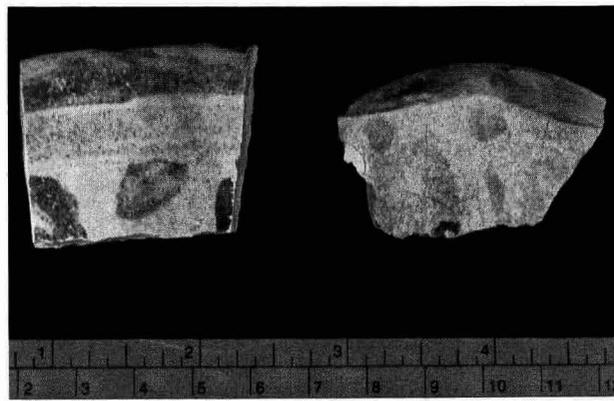


図7 ラスター彩陶器片

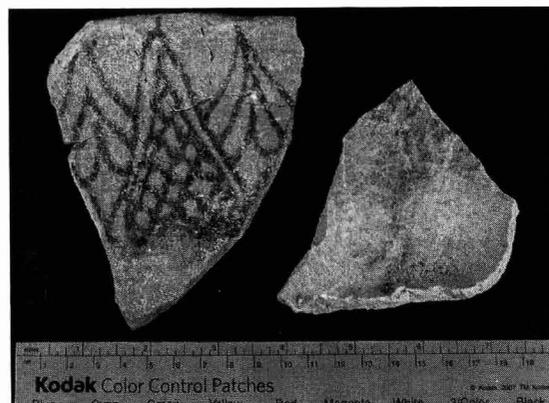


図8 スプラッシュ文黄釉陶器



図9 石製ランプ

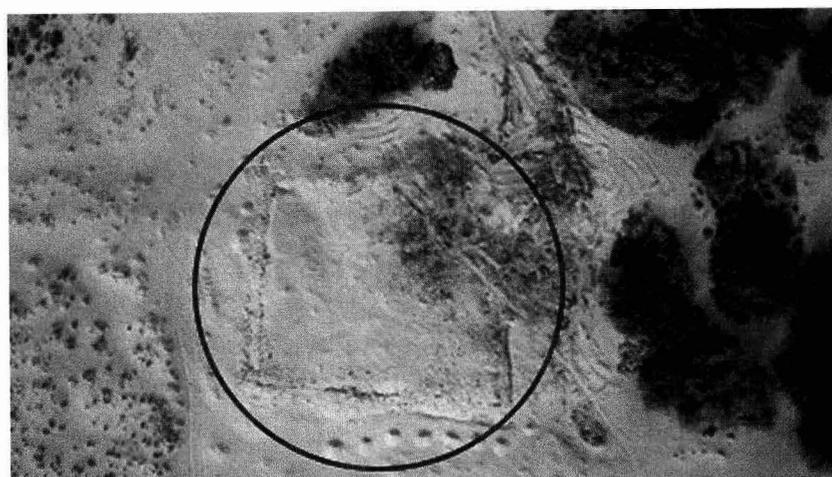


図10 砦と推測される遺構

この遺構は、厚い壁厚(約1.5m)を有するほぼ方形の珊瑚造の建造物(約34m四方)であり(図10)、その防御的性格は明らかである。ムカダスィー(d.10C.)の記述には、「砦と集落、市場」の存在がみられるために、発掘の前段階において、歴史文献との接点となるメルクマールともいうべき大きな指標が得られた成果が注目される。

後背地調査では、ウムルジュ、イース al-'Is、ヤン

ブウ・アンナフル Yanbu' al-Nakhl 間の地域で39点の古代北アラビア文字グラフィティ(サムード文字C、D)(図11)、1点の古代南アラビア文字グラフィティ、24点の初期イスラム時代のアラビア文字グラフィティに加え、さまざまな時代のペトログリフが発見された。

ハウラー遺跡の考古学調査は、年明けの2020年2~3月に発掘調査が予定されており、集落域の住居



図 11 ウムルジュ・イース間で発見された古代北アラビア文字グラフィティ

跡と上記の砦とみられる遺構の調査を集中的に行う予定である。また後背地の碑文調査も計測的に行うこととなるので、発掘報告会では、これらの最新の成果を

速報としてお届けできるであろう。

■参考文献

(欧文文献)

1. Blue, L., Cooper, J., Thomas, R. and J. Whitwright (eds.) 2009: *Connected Hinterlands: Proceeding of Red Sea Project IV, Society for Arabian Studies Monograph No. 8, Southampton.*
2. Damgaard, K. 2009: "A Palestinian Red Sea Port on the Egyptian Road to Arabia: Early Islamic Aqaba at and its many hinterlands" in *Blue et al. (eds.), op.cit.*, pp. 85-97.
3. al-Ghabbân, Ali Ibrâhîm, *Les deux routes syrienne et égyptienne de pèlerinage au nord-ouest de l'Arabie Saoudite*, Le Caire, 2011.
4. Hasegawa, S., R. Tokunaga, S. Nishimoto and Abdulaziz Alorini 2019: "A New Perspective on the Site Plan of al-Hawrâ', a Medieval Port on Saudi Arabia's Red Sea Coast" *The 53rd Seminar for Arabian Studies, University of Leiden*, 11th-13th July 2019 (poster).
5. Power, T. 2009: "The expansion of Muslim Commerce in the Red Sea Basin, c. AD 833-969" in *Blue et al. (eds.) op.cit.*, pp. 111-118.
6. Power, T. 2012: *The Red Sea from Byzantium to the Caliphate AD 500-1000*, Cairo.
7. Sidebotham, S. E., M. Hence and H. M. Nouwens 2008: *The Red Land: The Illustrated Archaeology of Egypt's Eastern Desert*, Cairo.
8. Whitcomb, D. S. 1989: "Coptic Glazed Ceramics from the Excavations at Aqaba, Jordan" *Journal of American Research Center in Egypt*, vol. 26, pp. 167-182.

(アラビア語文献)

1. al-Idrisî, *Kitâb nuzhat al-mushtaq fî ikhtirâq al-âfâq*, Cairo, 1990.
2. al-Muqaddasî, *Ah şan al-taqâsim fî ma'rîfat al-aqâlim*, Damascus, 1963.
3. Yâqût: *Mu'jam al-buldân*, Beirut, vol. 2, 2010.